

昭和五十一年七月九日 ご講演

「本日ただいま誕生」

私は、ただいまご紹介いただいた小沢でありませぬ。本題に入る前に、一、二、私に関することを言わしていただきたいと存じます。

私は特別の人間扱いにされたくない

先ず、私は特別の人間ではありません。よく私の書いた本を読まれて、普通ではなかなかあるそこまでは行けないのに、そこを通り越したので、普通の人間ではないな、ということになるらしいのです。それに対して、私はそういうふうに言われることが残念でしょうがない。もし私を特別扱いにするような人があつたとしたら、その人は自分を逃げているんじゃないのかと、こういうふうに申し上げたいところでありませぬ。

私はごく並みの、頭もそんなによくないし、命が続いて、精いっぱい生きてきたということとで今日に在るわけですが、なにかそこに特別なものがあるんだ、というふうに考えられ、特別扱いされるといふことは、その人が自分にはそ

んな力はないんだ、そんな状況では自分だつたら参ってしまうだろう、ということと逃げているというように、私としては受けとれるということとを最初に申しあげたいと思います。

正直に言ひまして、私は、たいしたことではなかつたのです。醜さも、弱さも、みなさんと同じように持つておつた者であります。ただそこに言えることは、こうなつた以上、今何をすべきか、どうしたらいいんだということが、その時、その時の、精一杯の私の私眼目であつたということになりましょうか。

私には愚痴・悔いがない

私は本を書いて、自分自身で、なおまた自分自身を見つめまして思つたことですが、愚痴とそういうものがない。まあ愚痴とか愚図りの材料を捜しますと、いくらでもあることになるんですが、それらを捜して、いくら掘つてみても、なら得るものがないということだけは見極めて、なにはともあれ、精一杯今日までやつてき

たわけですから、過去に対して悔いというものがありません。あの時、こうであつたなら、こうしとけばよかつたなあ、というようなことはちつともない。それは、その時々、私の精一杯の人生の展開があつたので、そういうことになつたと思ひます。

皆さん方も、それぞれ自分の能力の精一杯をやつてきたことだと思ひますけれども、どうかそういう意味で、悔いのない人生を送るようになつていただきたいと思ひます。

これはどこの本に出たか、忘れてしまひましたけど、五、六人の人がおつて、そこに一本の矢が飛んできて、ひとりが怪我をした。すると、二、三人の人は、矢はどこから飛んできたか、なぜ飛んできたか、ということを問題にして、そつちの方へ飛んで行つたそうですが、その中のひとりが矢を抜いて傷の手当をしたそうです。この場合なにが今大切であるかと考えますと、やはり、傷ついた仲間の手当が、最優先されなきゃならんということになるのか

大垣市法永寺住職 小沢道雄先生

と思う。そういった意味あいを考えます時に、私の場合には、いつも、今、何をするべきかという点で、精一杯にやってきたので、悔いがない人生であります。これからも悔いのない形で、終点まで行くつもりであります。

人間はみな死ぬ

ところで、私の所で毎月二十二日に五、六十人の人が寄って一日法座の会が開かれます。その時に、ある五十年配の人が、いつも参加します。体つきは、普通であります、言うことがちよつと違つてゐるんです。そこに集まつてくる人達に対して、「わしや、ちつさい時に、脳膜炎したので、おかしくなった。だけど、悪いことしないので、怒らんといて」、そういう挨拶をする。そして次に「人間、どうしても死ぬかいな」という。この挨拶に対しては、おじいさん、おばあさん、みんな一言もありませんけども、その後のことについては、みんな、「そりやそうだよ、みんな死ぬわいな」と言つて笑う。皆さん方もそう思うでしょう。一度死ぬことはまちがいない。死を言うことはいやがりませんけども、これは事実です。やがて、あと八十年くらいのおところで、ここにおる人は、みな交代ですね。まちがいない。これはいままで、みんなそうだった。その人は死ぬことが恐い。死ぬことが不思議でしようがない。「どうしても死ぬ

かいな」「そりや、あたりまえだよ。みんな、おじいさん、おばあさん、笑いながら言う。『どうしても、だめかいな』『だめだね』『天皇陛下でも、だめか』『そうだよ、みんな死ぬんだよ』という。私はこの人がまともなのか、と考える時があります。まあ死ということは必ずあるわけで、ほんとうはこれをしつかり見極めないと、本当の生きる姿勢がない感じであります。

私なりに人生を見、仏教を見て、

私の戦後史の一端を述べる

まあ、今日はそれとともに、私の戦後史の一端を申し述べまして、人の、人間としての心が、それぞれの状況で、どういうふうに変つていくであろうか、そして、戦争というものは、どんなふうなものであるか、平和というものは、どういうことであろうか、そんなことも考えていただけたら、まことにありがたいと思います。さて、現代は、大変恵まれた、大変豊かな日本であり、平和な日本です。しかし、この中にいろんな問題が内在していることも事実であります。その中で、皆さん方の心の中に、人に対する同情、愛情、ボランティアの心も、当然、確かにあると思う。しかし、そういった心も、状況が変化していつて、自分が餓えて餓えて、腹がすいて、どうしようもなくなった時に、果たしてその心を持ち続けることができるであ

ろうかというようなことも、この恵まれた今の状態から、しつかり自分の心を見つめ直してほしいと思う。そういうような、自分に対する問いが真剣であればあるほど、これからの人生に対するひとつの指針がおのずから出てくるのではないかと、私は思うわけであります。

私は、こういう格好しており、お坊さんにまぢがいないけれども、あんまり仏教のことは勉強しておらないし、修行もしておりません。それで、いい仏教の話ということではないかもしれませんけれども、私なりに人生を見、仏教を見ている私の言葉で、この戦後史を述べさせていただきたいと思ひます。

捕虜生活の厳しき——強制労働・食事

皆さんはまだ生まれていなかったでしょう、日本が無条件降伏した昭和二十年の八月十五日には、私は北朝鮮にいました。そこで、ソ連軍の捕虜になり、すぐシベリアに抑留されました。終戦でなぜシベリアで強制労働しなきゃならなかったかということについては、釈然としないところはありますけれども、日本は無条件降伏でありましたので、なにもそれに対して抵抗することはできなかった。いうなりのシベリアの強制労働で待っていたのは、炭坑の労務者、石炭掘り、これが一番きつい仕事でした。あとは原始林の伐採作業、その伐採した材

木を搬送する労役、これが重労働。一番軽い作業がコルホーズ農場のイモ掘り作業というふうなことでありまして、ソ連軍が銃剣を突きつけて、一定のノルマを要求する。

ところが当時の食料は大変おそまつで、一食のパンがこのタバコの半分くらい、一口で食べられるようなパンだ。ところが、これにスープが付きましたけれど、スープの材料といったら、五百名の収容所で、三日分として塩漬けニシンのただの三十四。今日、皆さんの食べておる食事をいただきましたけど、たいしたものですね。なにしろ三日分としての塩漬けニシン三十四では、どうしようもないので、知恵を絞りました。炊事の釜の上に金網を作って、ニシンのつける。お湯がグラグラ煮え立ったら、網をおろしました。あまり煮ると三日分持たないので、すぐ引き上げて、岩塩をほおりこんで、それがスープである。ですから、最初の頃、飯盒（はんごう）の蓋一杯にして、このくらいのニシンの油が二つも浮いておいたら、上等のスープである。それを、ゆっくり飲みながら、だいたいこのくらいのパンを十口くらいに食べたもんだ。ボチボチ、ボチボチ、なるべく時間をかけて食べた。まあ、そんな食事で、強制労働でありますので、みんな痩せてしまいました。

夕方、四列縦隊で足を引きずりながら帰ってきて、宿舎の入口のレンガ二枚の高さの敷居を、

まともにまたいで中に入れる者はひとりもなかった。みんな横の柱に手を添えて、足をやっとなげて、倒れ込むように宿舎に入ったものです。そういうことでありますので、栄養失調の患者とか、病人が相当出ました。そして激しい強制労働でありますので、怪我人も相当出た。私も伐採作業中、肩に怪我しました。

後送——凍死・凍傷

そこで怪我人・病人は、満州の牡丹江の病院に後送されることになりました。むこうを出発した時は十一月中旬、零下三十度を越えております。全員、夏の軍服に夏のコート一枚で、ひと列車五百名で出発したわけですが、十人に二キロパン一本、一日分として配給になったけれども、もうパンがカチカチに凍って、持つてると怪我するんだ。やっとな、それを分けて食べようとしたが、凍っておりますので、かすかに歯の跡がつくかつかないかあります。それも、二日目ぐらいまでは食べたんだけど、三日目、零下四十度を越すことになると、もう食べる力がなくなりました。冷蔵庫の中の物が、乾燥しながら凍っていくのと同じようなことでありまして、私は肩胛骨が飛んじやったものから、こうやって副木を当てて縛っておったので、動きがとれませんので、足を投げ出したまま貨車に寄りかかっておった。私の両隣、やは

り足を怪我した者が、同じように足を投げ出して寄りかかっておりました。立てる者は立って、貨車の中で肩を組んで、「ヨイシヨ、ヨイシヨ」と言って足踏みを始める。じっとして居られないんです。零下三十度を越し、四十度になる。眠気が襲ってくる。眠気との戦いでしたね。

三日目の夕方、私の両隣の者は凍死です。私はその二人に挟まれながら時を過ごしたわけですが、五日目に「息のある奴から先に運べ」と言う声を聞いて、牡丹江を知った。でも、その時には立っている者はひとりもいなくて、全部寝ておった。聞けば五百名の中で、半分凍死した。残った者は全部凍傷。そこで、牡丹江の病院で受ける治療といっても、クレゾール温浴といつて、クレゾールの液に患部をつけるだけ。ここ（口）からの栄養補給がないので、やはり回復しません。

両足切断

私も一番ひどい仲間でありましたけれども、足のここまでは回復したんだ。一番ひどい重傷者は、ここから先は回復せずに、とうとう死んじやった。凍って血行しないんだ。もう血管、それから神経の作用がなくなりました。そうすると、血管が破れて炎症をおこします。色がだんだん黒くなっていく。二十年の一月十三日、私の両足は、麻酔薬なしで、切って落とされた。ソ連

軍は病院を管理すると同時に、優秀なお医者さんとか、薬、医療器具とか、よいものは全部接收してしまいました。軍医さんの優秀なのは、やはり徴用して、自分たちのほうとか、中共軍のほうに持って行った。残ったのは、今でいうインタンです。若い軍医さん達です。未経験ですね。私の足を切ってくれた人は、内科出身の若い軍医さんで、その日初めてメスを執ったという。そういうことは、噂になるものです。また、手術室の明りだつて、こんな明りじゃなくて、アセチレンという青い灯が四つ燃えておつたのを憶えている。麻酔薬なしで、向こう脛を落としました。

まあ、皆さん方には想像もつかんででしょう。異常な事態であります。手術といひましても縫い合わせはなかった。切りっぱなしだった。全身硬直して、二時間余りの手術に耐えたわけですが、麻酔薬をかけてないもんで、軍医が今なにをしておるか、はつきりわかりました。ちょうど、軍医といつしよになつて、自分の足を切るような状態でした。硬直したまま、息は吸い込めなかつた。吐くだけだった。吐いてたので、時たま吸い込んでいたのじゃない。だけれど、そういった感じが、息を吸い込めたつていう感じが、こうでできたのは、一週間か、十日目でした。もう痛さの極限の中で、「痛さは、痛さに任せてしまえ！」と、自分で自分に言い切つ

た時に、やっと息が少し吸い込めた、そういう感じが残っております。仲間は、手術中に何人か死んだ。特に、不思議なことですが、三日目か四日目には、相当亡くなつたらしい。

命は続く——教養が信念か

私は、命が続きました。当時、北滿一帯に発疹チフスが流行し、三十度か四十度の高熱がでて、みんなバタバタ倒れる。私もそれにかかつてしまった。両方の足にこんな大きな傷があります。切りっぱなしですね。足の傷は直角に切つて、骨の見える断面を縫わずに、断面にガーゼをたてて包帯を巻いたままという状態が、その手術の終わつた状態です。だから、そういう傷があるでしょう。で、肩の傷はそのままところへ持つてきて、こちらの残つたほうが、全部発疹チフスだった。もう、申し分ないということだつたと思います。

そんなことだつたら、もう、いつそのこと死んだほうがいいというふうに、皆さん、思うでしょうね。私も死んだほうがいいと、何ほ思つたかしのれない。しかし、死ぬませんでした。仲間は、発疹チフスで相当やられまして、三分の一くらい死んだんですが、私は命が続いた。そこで言えることは、まあ信念つていうようなことです。皆さん方はよく教養ということの問題にされることと思う。皆さんも、教養を身につ

けておりますね、すばらしいことだ。で、信念というものは、自分でいろいろ考えて、「よし、こうだ！」と思ひ定めて、自分の柱にすることがあるだろうと思う。どうですか、信念をしっかりと持っている人あるかな。そういう状態の中で、やはり教養というようなものは、どうも私の感じとしては、着物みたいなものなんだ。長持ちして三日くらいだ。

病室には、いろんな人が出入りします。亡くなると、やはり病室が足りないで、次々入ってくる。いろんな大学出たとか、地方でこうだつた、といわれる立派な日本人が、確かにこの人は教養を身につけておる立派な日本人であるというような人がありましたけれど、やはりそういった状態においては長持ちして三日、早いのは、もうその日のうちに、同列同級になつたということだけは、事実であります。それで、そういったことを考えます時に、どうか皆さん方が身につけておる、いわゆる教養と称するものを、今一度自分で見直してほしいということをお願いしたい。ただ、なんとなく着物を着た、そういうことであつてはならないように思ひますね。そういったところで、やはり力になれる教養というものを、いわゆる信念といふものを、しっかりと見極めてほしいと思ひ、そんな意味で自分自身の心といふものを、今恵まれた形ですっきり見つけてほしいと思ひます。

仲間は、どんどん死んでいきます。私は命が続きました。だんだん薬物が少なくなってくる。最初手術した時には、リバノールといって、あの黄色い液で、ガーゼを湿して、包帯交換してくれたんだけど、それがだんだんなくなりまして、四月頃になると、食塩ガーゼ——石鹼がないものですから、食塩でただ煮沸しただけの真黒になったガーゼ——それでただ患部を拭くだけみたいな具合になった。

再び食料事情

そして食料もだんだん不足していく。コーリヤンのお粥が、やがて粟粥になります。粟つていうのを知ってますか。皆さん方、知らん人もあるでしょうね。ちいさい、今だったら、小鳥の餌になつてゐるあれです。そのお粥が、私どもに当たりまして、そうですね、ちょうどこの舞台ぐらゐの大きさの病室に、私たち六十名、いつも寝ておりましたけども、食事時になると、炊事から石油かん三杯の粟粥が運ばれてくる。入口の机の上に、各人の食器が並べられます。食器といいますが、当時私どもの使つておつた食器は、缶詰の空缶、マグロのフレークの缶詰、ご存知ですか、あの空缶に取っ手を付けたのが、私どもの食器だった。

私たちは、捕虜の中でも一番みじめな階級です。そんなものしか当たらないんです。そ

れが並べられる。いよいよ分配になると、寝ておるのも、こうやって首だけ上げて、分配のほうを凝視する。すると、最初の六杯は、炊事からお粥を運んできた者の権利として、底の方からゆっくり掬い上げられ、六つに分けられる。一般のほうになると、食函を二回ぐるぐるつと杓子で混ぜて、さつと掬つて各人の食器に移す。移したとたん、食器の縁を二回とんとんと叩くことになつとる。これは当時決まりでした。それをみんな寝ておる者の、重傷者も、首だけ上げて、こうやって見ておつた。粟なんでものは、それ自体軽いものだ。それをお粥に炊いて、もつと薄くしたものです。本当は濃淡なんかないんだけど、底のほうは濃いんじゃないか。これは解かるでしょう、この感じは、解かりませんか、底のほうは濃いんじゃないかって。そして、二回混ぜるつていうんだ。さつと掬つて、食器にあける。縁を二回叩けば、ひと雫の問題も、みんな納得したという状況であります。分配のきびしき、当時私どもは、そのお粥を食べるのに、特製のスプーンを持つておりました。自分で作れない者は、人に作つてもらつた。スプーンでものは、こういうものですね、そうでなかったらスプーンじゃなかった。ところが、これで食べると、お粥が早くなつてしまふ。自分のやつがなくなつて、ひとの食べるのを見たら、それが辛くて、辛くてしょうがない。そ

こで、みんな掬えないスプーンを持った。これじゃあスプーンじゃない。これでお粥を食べました。困りのほうを見渡して、誰よりも遅くまで食べようというふうに、偉い努力をしたものです。食べ終わつた時に、「ああ、腹がへつたなあ」という実感がしみじみして、食べる前じやなくて、食べ終わった時に、想像つきますか。ずっと腹のすきつぱなりました。すこしここに入つて、胃袋が活躍しましたが、後が続かないので、それが猛烈な餓え、空腹を覚えたという感じですね。

訪ねてきた過保護の学生と 自主性のない中年の男

このあいだ、今から三年前、私のところへひとりの大学生がまいりました。私の近い所に歯科大学がある。新設の歯科大学の学生だ。講師に連れられて。その講師は女の先生だったけれども、私のところへちよいちよい来た。それで、「先生、どうか、この子を指導してくれませんか」と。聞いたらその学生は、関西の大都市で相当大きな繁盛しておる私立病院を経営しているお医者さんのひとり息子として生まれました。生まれた時から、自分の欲しいもの、おもちゃであれ、お菓子であれ、なんでもそこへ並べられて育つた。欲しいと思わぬうちに、並べられて育つた。小学校、中学校、これも機

嫌よく過ごしました。高校も私立で、二年になった時、いよいよお父さんの後を継いでお医者さんになろうとしたが、その成績では国立の医科は無理で、そっちのほうは最初から諦めたそうですが、私立の医科だったら、金はいくらでもあるので、お父さんが札束を積んで、あっちこっち交渉したそう。しかし、いくら私立の医科大学でも、こと、人の命にかかわり合いがあるもので、一定のレベル以下の者はなんともしようがないと、社会的責任で断わられた。

本科のお医者さんだったら、まあ無理ですが、世間体もあるので、歯医者さんだったらまあいいだろうというわけで、新設間もない、金の欲しい、私どもの隣町にある歯科大学へ交渉して何千万というお金を積んだら、ようやく入学しました。彼の学生生活は、家一軒借りて、賄い婦付き、電話付き、車庫付き、車庫の中には外車が入るとる。皆さん羨ましいと思うでしょう。一回大学に入ると、後は勉強しなくてもいいらしいね。皆さんはそんなことはないでしょう。が、そういうことらしい。それで、彼は勉強する癖がついてなかった。難しいことは、もう考えるのやめ！ お金のほうは、お母さんが先まわり先まわりで、「もうなくなつた頃じゃないの」と向こうから電話をかけて、持ってきてくれたそう。食べるものは、なんでも欲しいものは、食べられる。青春時代の一番問題点であ

るガール・フレンドのことにつきましても、いい格好して外車に乗っておつたら、向こうから手を上げたということらしい。努力しなくても間に合つちやつた。

そうなつたら、彼は人生がつまらなくなつた。張り合いがなくなつたんだ。解かる？ これは、あんまり恵まれすぎたので、張り合いがなくなつた。人間の心というのは、不思議だ。「お前さんのお父さんは、人の診察ばかりしておつて、自分の息子と自分の診断をしなかつたのか」。

まあ、話を聞いたので、私はその子に、相当皮肉つたつもりでいったんだが、反応なし！ それに対しては、なんともしようがないです。腹のすいたことのないのに、飯のうまさを説明しようとしても、なんともしようがない。

「もう、あんたはダメ！ このままポケットと、なんとなく過ごすよりしかたないな。これが俺の診断だ」といったんだ。そういつたつて反応がない。目に輝きがない。顔も青くふくらんで、もやしがもうちよつと日に当たつたような感じで、なんともいえない。「見込みなし！」そういつたら、連れてきた講師が、「それでも、せめてなにか一つでも教えてくれ」という。口でいつてもわからんという時には、私ども禅宗のお寺にはすばらしい道具があるわけだ。警策といつて、檜の棒でできたやつで、座禅して姿勢が悪かつたり、居眠りしたら、肩を力一杯叩く

棒がある。言葉でいつても解からないのには、叩くより仕方ない。「そこへ坐れ」といつて力一杯叩いた。私は警策を使う時には、力一杯することになつていくんですよ。そういう方針で、力一杯叩いた。五つ叩こうと思つて四つまで叩いたら、彼はそこに這いつくばつて、「勘弁して下さい。申し訳ありません」と、私に謝ることないのに、そういうのです。それ以来、彼はきません。私に責任ないものを、追っかけていつてまですることはしない。恐らく彼は、卒業できなかつたと思う。今も、ポカッとなんとなく過ごしているんじゃないかと思ひます。これは恵まれすぎた不幸ということ。す。

もうひとり、極端な話ですが、こういうのがあります。私が、本を出したら、それが中部地区の中日新聞の社会面に、一頁四分の一の大きさに載りました。そのまま、東京新聞というのに載りましたが、それを読んだといつて、六十二歳になるお母さんと三十二歳になる男性が、私のところに来ました。聞けば、彼は目下、勤めを休んだ。結婚して、子どもひとり生まれたんだけど、別居中で、毎日家におつて夜は睡眠薬を、昼間は安定剤を服むといつた繰り返しをしてる。お母さんのいうには、この子は、小さい時から頭はよかつた。小学校、中学校も首席。高校も都立の高校を優秀な成績で出て、二十四倍という競争率で、国立工業大学に入った。

スポーツは、何でもできた。身体も相当立派な男です。優秀な成績で卒業して、教授の世話で三菱電機に入ったそうだ。そこでも成績優秀だったので、アメリカに研究に行き、いいポストだったそうです。アメリカから帰ってきて、会社の関係の、そういった面での講師までやるようになった。給料は、余計もらえるということで、年頃になったので、お嫁さんを捜した。お嫁さんがみつかりました。結婚式をした。

ところが、お母さんのいうには、このお嫁さんが問題であった。本人もそれに対してうなずいて、自分はちつとも悪くない。お母さんも、息子はちつとも悪くない、嫁さんが悪いんだ、という。息子がなにかいおうとすると、お母さんが遮って、ペラペラ言い訳みたいになっておりました。私の感じとしては、このお嫁さんは大変だったろうな、という感じがしたんです。お母さんに隙が全然ないんです。息子はそういう中で、お母さんが先まわり先まわりして、全部お膳立てしたところで過ごす癖がついとる。頭もよかったです、いつも人に羨望された形で過ごす癖がついた。そういう中で育ったのでそういう癖がついた。確かに勉強をしたんでしよう。成績もよかったです、ただそこにあるものを、そこで一生懸命やればよかった。彼は自分で特別工夫するということなく育ったわけですから。いつも、自分の思いの中にすべて納まった

形で進んでた。ところが、一番肝心な生活を共にするお嫁さんが完全に思いの中に納まらない人であった。私は全部じゃないと思うが、少しばかり思いの中に納まらないようなところがあった。それで、そういう育ち方をしてきたので、彼のコンピューターが狂い始めたら、もうだらしがないくらいに崩れちゃうんだ。彼は酒を飲んだ。身体もいかついで、相当飲んだらしい。理性が利かなくなる。とうとう胃潰瘍になり、入院する。その頃にはもう夜は眠れないので睡眠薬を、いらいらするので安定剤を服用しようになった。入院しているうちはいいんだけれども、帰ってくると、もう睡眠薬と安定剤を持たなきゃ毎日が過ごせないようになる。

そんな時に、彼は私の新聞を読んだ。そして「先生、なんとか指導してくれませんか」と、前触れもなく、東京からふたりで泊まってもいいような仕度をしてきた。私ども小さい寺なので困りますが、本を出した社会的責任もあるので、話を聞きまして、うちでは泊めることはできないので「私の関係していて、収容できるお寺に、まあ一週間、あなた行って過ごさない」ということで、私も一緒にいって一日過ごし、ちよいちよい私も覗くからということで、預けてきた。三日持たなかった。三日目の夕方には、彼はもう東京に舞い戻った。それ以来、もう私のところにもこない。

塾の生活——あまり恵まれ過ぎないこと、辛いことも逃げないこと

この二つの話は、恵まれすぎた不幸というような現代の一面をだしていることだと思ふ。まあそんなことを思う時に、皆さん方はこのすばらしい塾において、警沢はしたいたろうけれども、お金の面やら、いろんな面を考えた時に、やはりここが一番いい、ここでお世話になって、しっかり勉強しようということであろうと思ふ。ここはあんまり恵まれ過ぎない感じだもの、これはすばらしいことです。ちよつと恵まれて、条件がどんどん満たされてごらんなきい、つまらなくなる。これは事実です。やはり相当の規則があつて、窮屈な思い、辛い思いというものがあつてこそ、初めて、人間というもののは鍛えられる。生きる喜びというようなものが、噛みしめられるようになるんじゃないかと思ふ。

話がだいぶ脇道にそれましたが、私の場合には全然恵まれていなかった。これがよかったですね。恵まれてなかったために、私は今日まで一生懸命やってくるようになって、その間に精一杯にやってきました。今日のまことに平和な、安心した、いわゆる幸福な今日が過ごせておられるんだというふうな実感でございます。だから、少々の辛いことがあつても、皆さん、そこ

で逃げを打たないように。逃げたり誤魔化したらしたら、かえって問題がこじれて、苦しくなるのは当然でありまして、どうかその場で苦しさとか、切なさとか、辛さというものを、逃げずにそのまま受け止めて、そこで、その中で、呼吸をしているということであってほしいと思う。そうすると、必ず難しい問題につきましても、もう二進も三進も行かない、どうしていかかわらないというような問題につきましても、そのまま逃げずに、いわゆる呼吸を繰り返しているという言葉しかいいようがないんですが、そうしておきますと、その難しい問題がやがて自分の人生の、いわゆる肥やしになる栄養になる、ということかなあ、そういう形で必ず役立つていくと思えますので、どうか、そういう意味で、もう俺はどうしようもないんだ、というふうな形で音をあげて、逃げを打ったり、誤魔化したくないほうがいいと思います。

祖国への郷愁

話は前の捕虜生活へもどりますが、そのころは私はひどい餓えでしたね。だけど、どうしようもないんだ。梅干が食べたいなあ。あの酸っぱい梅干が食べたいなあ。香りの高い味噌汁を腹一杯飲みたいなあ。もうこれは事実だった。子どもの時に遠足に行った。大きなおにぎりの中に梅干が入っておって、それを腹一杯食べた

ことを思い出すなあ。そんなことを言ったのが、明くる朝、いつの間にか、冷めたくなっていたのがおりました。日本人の郷愁、そういう感じですね。梅干の酸っぱさ、味噌汁のしょっぱさ、この素朴な味というふうなものを思う時、なにか日本人の心にも、素朴な心の美しさというふうなものが、だんだん失われつつあるようである。残念でしょうがないように思われます。なぜであろうか。やはり、これにはいろんな条件が重なっておると思えますけれども、やはりこれは、個人主義というふうな形で、まあ歪められた教育の結果じゃないか、というふうに思えてなりません。

これは一方的な考えであるかもしれませんが、けれども、やはり人間は、お互いが心の真底の素朴な心を通わせるような親子でなくつちやならないし、友達同志でなくつちやならんとつくづく思えますので、今一度自分の心の素朴さ、素朴な自分の心というものはどういふものだ、そんな問いを自分自身に発してほしいと思えます。日本は爆撃でやられたらしい。東京なんて焼け野が原だ。広島なんて原爆が落ちて、草一本何十年と生えないということだ。しかしその故国には、母が待っておる。肉親、知人が待っておる。会いたいなあ、帰りたいなあ。しかしわれわれは戦争に負けてしまった。そして捕虜になった。その中でも一番惨めな病人、傷

ついた者だ。帰りたいけれども、おそらくわれわれは、この牡丹江で、満州で、生涯を終わるんじゃないのか。そういった絶望の毎日が続いていきました。脛を閉じるとね、自分の生まれた家のたたずまいが思い起こされる。小川が、山が思い浮かべられてくる。そこには、別れたままの母の姿や、肉親、知人の姿、恋人の姿が脛の奥に浮かんできました。ひげづらのおつちやん達が、目を閉じて故国のことを偲びました。松葉杖の者は、松葉杖をついて壁に寄りかかって、上半身起こせる者は、床の上に上半身起こして、寝たままの者は、寝たまま目を閉じて、故国日本のことを偲びました。望郷の歌ですね、そして歌を歌った。ゆつくりしたテンポで。

河岸の柳のゆきずりに

ふと見合わせる顔と顔！

こんない声じゃなかったよ、もつとしゃべい、声にならんような声だけど、私も淋しかったので、みんなと一緒に歌った。歌はあんまり好きじゃなかったけど。ところが、この歌が終わって、しばらくすると、今度はとても淋しい歌が歌われました。ひとりが歌い出すと、やがて全員の合唱になりました。これは、ゆつくりしたテンポで、よく歌われたものです。

月の砂漠をはるばると

旅のラクダが行きました

金と銀との鞍おいて

ふたり並んで行きました

もう歌詞なんか問題じゃなかった。このメロディーに、みんな酔っておった。そこにあるのは、前途に一点の希望の灯のない毎日、そこにあるのは、ただ自分ひとりではない、仲間があるな、ということだけが、生きてる支えであった。まさに、これは絶望の集団でした。絶望の歌だ。この歌は、もつと状況さえよかつたら、相当いい歌なんだけど、私にとつては絶望の歌として、印象に深い歌です。

祖国への送還の旅――

担架で牡丹江―ハルビン―奉天へ

そんなようなことで、夏が過ぎて行きます。八月になると、使いものにならないのは、日本に送り出すという。使いものにならないのは、いわゆる重傷者だ。両足切断したものとか胸の病、カリエスを併発して、息するたびに、ブツブツ膿が出るような重傷者が、たくさんおった。私どもの集団は、まあ五百名で、牡丹江を出発するわけです。この担送患者五十名がその中に含まれます。牡丹江から胡蘆（ころ）島までは千五百キロの旅でありますので、ひとつの担架に四人ずつ満足な日本人が付くことになりました。この満足な日本人は、病院の中に訓練大隊というのがあって、そこで病気がなおった者は、訓練をして作業に耐えられるようになります、シ

ベリアの強制労働に持っていかれる連中のかから、私どもの集団には、二百名選ばれた。

そういうことが発表になったら、その二百名の中に入ろうとして、もう病院中が大騒ぎだ。喧嘩、怪我人まで出た。担架さえ持てば、日本に帰れるというので、命懸けになるのは当然です。病院長はどうとう音をあげ、中共軍が二百名を選び、その氏名を発表した。夏の日差しを受けて、私の担架は病院の前に並べられた。と、向こうのほうから、二百名の日本軍人が中共軍の引率で、そこまで来て、「さあ、これを持って、お前達は日本へ帰るんだ」。号令がかかった。こうやって見ておつたら、二百名の中で要領のいいのは、たちまち四人一組になって、担架のほうを見渡して、軽そうな担架のほうへ競争して走って行く。中には持ち上げて、目方を量って置き換えているものもある。これは、人情ですね。持って行くのは、なるべく軽いのがいい。今、皆さん方は、おそらくずいぶんひどいことだと思つるのは当然ですが、事態はそういうことでありまして、私は人間不信ということと言いたくない。しかし、現実にはそういうことがそういった状況の中で行われた事実は、隠しようがないので、告白します。

今、皆さんが恵まれた形で、ずいぶんひどいことだなあ、という皆さん方の心の中に、自分が状況が悪くなると、餓えて餓えて、自分がみ

じめになった時、果たしてどうなるであろうかということ、今の時点で、しっかり見極めておいて欲しいと思います。

私は顔が大きかった。一見骨太な感じがしたんでしよう。担架が隅つこのほうで量つてももらえない、それで二百名の中には最後までもつて、組み合わせのできないのが、あつちにひとりこつちにひとり、ポカッと立つと。だけど、彼らにしても、担架を持たなきゃ日本に帰れないでしょう。私の担架のところへ来て、覗き込んで、「俺たちが担いでやるからな」と言ってくれた。顔を見た、丈が揃いだ。その時には相当揺れるなという感じがした。やつぱり担架を持つてもらうには、丈が揃つてたほうがいいのですが、丈が揃いだ。まあ、それは冗談ですけども、担架が持ち上げられた。一様に牡丹江の駅に向かう。私は心中、込み上げる切なさで、目を堅く閉じて、手拭を顔にかけて、「ああ、いよいよ内地に向かうことになったなあ。この先には、故国日本がある。そこには母が待つておる。肉親、知人が待つておる。私は思いだにできなかったこんな姿になつておる。たとえ傷が治ったところで、膝をついてはいって、人に迷惑をかけるだけだ。しかし母にだけはひとり会つて、思い切り甘えて、その後で考えよう。しかし、私のこの姿を見た時に、母はなんと思つたらう。肉親、知人はな

んと言っただろう。私はなんと云えばいいんだ。そんなことが、次から次へと生じてまいりました。「いつそのこと、担架から転げ落ちて、牡丹江で死んだほうがいいな」という思いかられます。

しかし、そんな切ないほどの葛藤の中で、人間の心というものは不思議なものです。ふとこんなことを思った。「私はどうしようもない身になってしまった。たとえ内地に帰ったところで、人に迷惑をかけるだけだ。しかし私を担いでくれるこの四人は、シベリアの地獄の強制労働に行かずに、私を担ぐことによって、夢に描いた故国日本に帰ることになる。私はどうしようもない身になりながら、担がれながら、満足な日本人四人を故国に案内する役割がある。人生の役割とは不思議だなあ。また、切ないものだなあ」というふうになちよつと思つた。この思いが、私の悲しい心を少しなごました。そんな形で、私は牡丹江の駅に担がれて行きました。牡丹江の駅から乗った貨車は、無蓋貨車。石炭くずやら藁くずやらでいっぱい、こうフツと吹くと、もう埃がたつような所に担架が置かれて、牡丹江からハルビンへ。ハルビンで食料乾パンの補給を受けて、一日走ったところで列車はストップ。そこから相当の長距離を人力搬送。担架を担いでもらうことになった。鉄道に沿って、私どもの行列は続いておる。松葉杖の者、

一本杖の者、杖もなくよちよちと、行列に遅れまいとして、一生懸命歩いておる。その中には、私と同じように担架で担がれて行く人の姿もある。

すでにその時は、十日経っておりましてけども、五十あつた担架は四十の数を割つておつた。「これから何個この担架は日本に着くであろうか。途中で、相当消耗されるんじゃないだろうか」、そんな思いを浮かべながら、私は担架に担がれて行きました。私どもの行列は、夕方になるとストップし、ゴロ寝して明くる朝出発します。野宿ですね。私は、自分を取り戻した。夜露を凌ぐためにかけておつた手拭いをとつて、向こうを見ると、二十メートルほど先を、今にも開拓団の引揚げ者の人たちが通り過ぎようという場面でありました。私は咄嗟にこっちの手をあげて、「おーい、おーい、まだ生きているぞ」と声をあげた。こんなみずみずしい声じゃなかったと思うけれども、その声で、あげた手がその人たちに見つけてもらつて、私の旅が続ぎ、また、私の命も続くわけです。その夜、荒野の真只中に、私の担架だけが置かれておつたら、恐らく狼に食べられてしまったんじゃないかと思う。

というのは、当時、人間ひとりの命なんて問題じゃなかった。私を担いでくれた人たちも、そこまですてきな言葉でなんか相談しな

くてもよかつた。目だけで領いて、相談ができちゃつたような状況だった。「死んだことにしよう」で、私の担架を置いて行けた、そういう状況です。私にも原因がある。いくら口から入るのが少なくても、雨上がりの雨だれの如きものでも、十日に一回か、二週間に一回は、生理的要求がありました。まあ、いかに少なかったかということ。もう、全然乾燥してたやつが、臭くないのが出たもんです。で、その夜もハルビンで乾パン少し余計にもらつて、少し余計に食べたのも原因したのでしょうか、今晚この辺でやつたほうがいいじゃないのか、と思つたので、「すまんけど、そこら辺まで担架ひっぱつていつてくれんか」と私が頼んだのです。五六メートル先の夏草の蔭までです。それで、彼らにとつては、担架を足元に置いておつたら人目があつて忘れるわけにはいかないんだけど、ちよつとはずれておつたところで、置き去りにしようという相談が成り立つたわけです。それで、私は思うんですが、もしこのような状況の中で、私がおもひ担ぐ立場であつたならば、私だつてひよつとしたら目だけで領いていったんじゃないのか、と思ひました。四人に対して恨みの心はちよつともないわけです。

私の担架が日喬管理所の要所、要所に置かれて、今度は誰が担ぐか、選手の交代です。奉天の駅前でも三日、私の担架だけが置いたままに

なった。で、そこで三日目の夕方、日番管理所の要員に見つけてもらって、奉天の鉄西地区藤倉電線工場倉庫跡という所に収容された。そこは、ひどい所でした。この世の地獄です。みんな地獄の餓鬼、畜生に落ちておる中で、私自身も傷ついたまま、餓えたまま、同じように過したわけだ。自分の醜さ、自分のおそまつだということ、この目でこの身で確かめました。信念信仰を持っていたつもりであつたけど、それは全然つもりの甘さでしかなかった、ということがよく解つた。そういうような所で二か月過ごしました。

病院船——博多上陸——小倉病院

十一月中旬、胡蘆島に病院船氷川丸が迎かえにくるということで、私たち重傷者は奉天を出発して、いよいよ故国に向かう病院船・氷川丸に乗船します。この時の感激は、もう強烈でした。白衣の天使が、船で、こう両手を添えて、迎えてくれました。美しい顔でした。みんなみずみずしい顔、みずみずしい声です。「お帰りなさい。お帰りなさい。よう帰ってこれましたね。もう大丈夫よ」、そう口々に言って、私どもを迎え入れてくれる。あつ、日本にはまだ白衣の天使がおつたのか。こんな美しい日本女性がおつたのか。この人たちは日本の母だなあ。胸がもう、じーんとします。

私ども重傷患者は、特別船室に運ばれて、ここでも、きれいな看護婦さんが、若い看護婦さんが待っておる。私の汚れた顔を払ってくれる。「ずいぶんひどいことでした。よう帰って来られましたね」と言ってくれたとたん、看護婦さんの目が潤んで、涙が一滴、私の顔に落ちた。もうたまらない。忘れておつた涙が甦つて、とめどもなく、私の両眼から流れ落ちました。しかし、甦つたのは涙だけじゃなかった。今にも枯れ果てんとした、人間としての大切な心が涙と共に甦つた感じでした。人間の心というものは不思議で、これはもう本当に、強烈に残つておる。その夜は、快いスクリューの音を聞きながら、私はゆっくり眠つた。

船が博多の波止場に着いた十一月十九日、いよいよ故国上陸第一歩と言いたいんだけど、私の場合には寝台のまま、担架のまままで、立つこともできないんだから、上陸第一歩なんて言えん。ギー、ガラガラ、ドスンといって、担架が荷物と一緒に波止場に着地したというのが本当です。そこで待つておつたのが、かの白い有名なDDTというやつです。今あんまり使つてないらしいけど、ご存知ですか。二人がかりで、ここをこうあけて、白い粉がプカプカプカ出て来た、はい出して来た。話は聞いたことあるけど、現物は見たことないでしょう、皆さん

方。シラミというやつ、ノミより、もう少し凶体が大きくて、敏捷でないやつ。跳ねないやつです。それが、もうボタバタ落っこつてくる。小ささまざまなやつ。こうしたらね、このくらいあつたんじゃないかと思うくらい付いておつた。彼らは牡丹江出身、大陸の千五百キロの長途の旅。はるばる海を渡つて、私の栄養の少ない身体に住みついて、DDTのために、そこで全員討ち死にです。

そういう状況の中で、肉体の神秘だ。直角に切つた骨の見える断面でも、皮のほうから少しづつ薄い皮が張つてきた。船に乗つた時に最後の穴が塞がった。しかし、神経を手術してないので、さわつただけで、ぞつとするくらい痛かった。自分の骨を自分で見るのは辛いことです。まあ、皆さん方も、向こう脛をこうやつて見ると、二本あることは確認できることだと思ふが、あの時には、向こう脛が二本あることがよく解つた。

その夜遅く小倉の病院に着いた。着ておるものを全部脱がせられた。それからすぐ焼き捨てるんだ。あれ以上汚れようのないくらい汚い物を着ておつた。大切な食器も相当汚れておる。しかし、目が覚めると、いつも手にさわつておつて、これでお湯をもらつたり、お粥をもらつたりした命の綱だ。これは記念品にと思いましたが、問題にされそうにもないので、そのまま

処分してもらった。あれを持っておいたら、私
 においては、もう重要文化財級の物なんだ。私
 は全部脱がせられて風呂に入られた。一年半
 ぶりです。若い看護婦さんが「落ちるわ、落ち
 るわ」といって、さも落としがいのあるもの
 ように、キヤツキヤツ言いながら私を縦横に洗
 ってくれる。垢は申し分なく付いておったけれ
 ども、脂気が、栄養が少なかったんで、落ちは
 よかったらしい。垢を全部洗い流して目方を量
 ってもらいましたので、これが真正正銘の正味
 三十八キロ。骨の目方だけだ。ちょうど骨にビ
 ニールの薄い皮を貼っておいたようなもので
 しようね。

病院というところは、まことに不思議な所だ。
 なにも足を切って寝ておるものの身長まで測
 らなくてもいいんだけど、身長を測ってくれ
 た。一メートル四十センチ。これだけ短くなっ
 た。年齢は二十六歳。皆さん方の平均年齢は二
 十歳か二十二歳くらいですか。私は二十六歳の
 時に、足を落としました。明くる日、外科部長
 の稗田先生の診断があり、「これはひどい、よ
 うこれで内地まで帰れた。壊疽（えそ）にもな
 らずに、よう命があったなあ。私が見た以上、
 医者立場として放っておけない、すぐ手術
 だ」ということになりましたが、そのすぐ後、
 連合軍司令部から米軍将校が厚生省の役人を
 帯同してきた。シベリアの冬期輸送はひどいこ

とだった、という私どもの状況がすでにキヤツ
 チされており、国際問題だということで、私は
 生き残りとして証言を求められた。聞けば、私
 どもの犠牲があまりにも多かったので、ソ連軍
 は私どもを最後として冬期輸送をやめたとい
 うことであります。今度こそ小倉の病院で、至
 れり尽くせりの設備の下で手術してもらいま
 した。皮被せてちゃんと縫ってもらいました。

相模原病院での母子対面

しかし、その二週間後、私の人生にとって一
 番辛い悲しい場面が待っておりました。それは
 国立相模原病院で母と肉親との再会でありま
 す。外科部長が「郷里に近い相模原病院に転送
 するから、面会はその時にしたらどうか」と言
 ってくれたし、私も無惨な姿ではありながら、
 せめて整えられるだけ整えて、母に会いたかつ
 たので、足の手術のために遅れるが面会は相模
 原病院ですることを連絡しておいた。

神奈川県相模原病院に転送になったあ
 る朝、甲府から母と弟が飛んできてくれました。
 私は包帯の足に毛布をかけて、ふたりを待つて
 おりますと、看護婦さんの案内でふたりが入っ
 てきた。弟は私の顔を見るなり、「どうなった
 の」と言った。「シベリアでな、凍傷になって
 両方とも切ってしまった。死のうと思っただけ
 も、申し訳ないけど、帰ってきた」。これだけ

やつと言えた。すると、母は一步寝台に近づき、
 小さい声で、「傷は？」と一言いつてくれた。

そこで私は毛布をまくって、包帯の足をだしま
 した。母は両手を震わしながら、包帯の足にそ
 おつとさわって、目を堅く閉じてしまいました。
 「申し訳ないけど、帰ってきた。こんなことな
 なって帰ってきて、どうか許してくれ」。もう、
 そういう心でいっばいです。母はだまったまま
 だった。私がそこでとり乱しては、ふたりに申
 し訳ないと思つて堪えたが、堪え切れません。
 せめて義足をつけたなら、と自分にも言い、母
 にも言おうと思つた。その時です、目を閉じた
 まま、母の口から漏れるようにひとこと言葉が
 でした。ちっさい声でありました。「よう帰つて
 きた」。ようお母さんがそう言ってくれたと思
 うと、私はもう下を向いて、歯を食いしばって
 我慢しました。恐らく母の考えた言葉ではなか
 ったと思います。「どうか、こんな姿になって
 帰つて来て、許してくれ」という私の心を、そ
 のまま受け入れてくれた心であった訳ですね。
 ふたりが帰る時に、「兄貴がフィリピンで戦死
 した」、そういうふうになんて帰つちゃうと、
 私は毛布を被つて、クツクツと泣くより手がな
 かった。一番頼りにした総領の戦死を愚痴ひと
 つ言わず、無惨な次男坊の姿をまのあたりにし
 て、「よう帰つて来た」と言ってくれたと思つ
 と、ただ泣けるだけだった。

祈りの心

まあ、そういう状況で、私の内地の生活が始まります。まもなく私は相模原病院から目黒にあった国立東京第二病院に転送になり、そこで療養の日を過ごします。親戚、知人が来て、「元気を出せ、しつかりするんだ」とみんな言ってくれる。私は寝たままらずだけで、元氣の出しようがなかった。元氣というのは、何か元氣を支えるものがないと出したことにならない。応えがないんです。足を切っちゃったということは、応えがない感じですよ。俺が帰って来たことで、この人たちは重荷だろう。当時、日本中が混乱しておって、まだ餓えておった時代です。「天皇、米よこせ」のデモが、皇居前の広場で繰り広げられておった。俺が帰って来たことで、この人たちは重荷だろう。自分らが生きるのが精一杯だ。そこへ俺は帰って来た。母はよう帰って来た、といってくれたけれども、私にはどうしていいかわからない。元氣を出せという伯父が、その言った言葉の後で、これからどうして生きていくだろう、という戸惑いを持って私を見ているだろう、ということが、二十七歳になった私にはよく解った。

面会には来てもらいたい。寂しかったので、優しい言葉をかけてもらいたい。しかし、そんなことを思うと、辛くて辛くてしようがない。

「しばらくひとりにおいてくれんか」と頼むようになった。どうしよう、どうしたらいいんだ。その問いが始まりました。しかし、いくら自分に問うても、答えなんか全然出ない。俺が一番この世で不幸になったんだなあ、一番みじめだなあ。もう回りの人がみんな幸福に見える。自分がこの世で一番不幸だと思つたことがある。そう思う時が、人間が一番不幸な時です。悲しくて、切なくて、辛くて、心が錯乱状態になるような、動けない身で、病棟の屋根の上に乗っかって、ありつたけの声で叫びたくなくなる日もある。

そんな中で、いつの間にか、私の心に祈りの心が生じておりました。満州ではそんなことなかったけれど、いつの間にか祈りの心が生じておった。「南無大悲観世音、南無観世音菩薩、南無観世音菩薩、私には、どうしていいか解りません。どうか、私に生きる道を教えていただきたい、生きる力をお与えいただきたい」と祈り始めた。しかし、この祈りの半面、祈りなんて甘えだ、今さら祈つてどうなる、という反発が繰り返される。しかし、どうしていいのかわからないので、いつの間にか祈っておりました。これが相当長く続きました。

本日ただいま誕生

しかし、ある朝、観音様は私を裏切っておる

な。観音様は私を見捨てておるな。もう祈ることをやめよう。頼ることをやめよう——ふとそう思った。その時です。私の心の深い底から、苦しみの原因は比べることだ。比べる心の元は、二十七年前に生まれたということだ。二十七年前に生まれたので、悲しく、切なく、辛い。「もうだ二十七年前に生まれたことをやめにしよう。両足切断したまま足の痛いところに、動けないところに、今日生まれたことにしよう。今日生まれた者には、すべてがまつさらだ。よし、本日ただいま誕生だ。日本ただいま誕生だ」。

これはひらめきに似た心の光りで、私はそこで、精一杯に心で力みました。

そして、観音様のことを、こんなふうにかみしめた。必死に祈りする私を、観音様はじつと見ておられた。しかし、障害は重度である。なまじつかな救いでは、この男をダメにしてしまします。じつと見ておられた観音様が、もうギリギリの行きついたところ、それ以上逃げ場のないところで、「本日ただいま誕生」ということを私にお示し下さったに違いないんだ。そのように、私はかみしめて行きます。足のない私の生きる足がかり、これが「本日ただいま誕生」という言葉です。嬉しかったですね。人生の転機をつかんだ。初めて生きる足がかりを得ました。

自分への三つの誓い

当時、私はそう言いながら、全部人の世話になっておった。そこで、自分の身辺をしつかり見廻して決めたことが三つあります。

- 一、顔だけはこやかにしていよう。
- 二、重度の傷痍軍人だ、重度の病人なので、人にものを頼むのは当然だ。しかし、当然だという態度は、絶対にとらんことにしよう。
- 三、やってもらったら、ありがとう、と感謝しよう。

この三つを通した。これがよかった。自分の約束をそのまま通してきた。よく人は「なかなか自分の誓いが守れない。三日坊主で困ったことです」。よくこんなことをいいます。まあ、そうでしょう。しかし、私の場合には、この当時、最低のところ、三つの柱を決めたことによつて、それを通し切ったことによつて、それから人生が徐々に解けてきた感じですよ。これはよかったですね。

どうか皆さん方、自分で自分との約束を持つたならば、それを破らずに通していただきたい、と思う。これを破る癖がついてしまうと、いつも同じところで、くるくる同じ空回りをしなきゃならん。これだけは事実ですよ。私の場合には、人生の終点までと決めちゃったので、このままにこやかにさわやかにいきます。本にも、人にもウソはつけないし、自分にもそれだけ信

頼しておりますので、終点までにこやかに、さわやかにいきます。

欠点を「性格」で逃げるな

さて、一般の人がなにか自分で決めた場合に、それをどんなふうに持ち続けたらいいか、ということについて、折角の機会でありますので、一言だけ申し上げておきたい。悪いことをやめて、いい癖を自分につける場合の、ひとつの秘訣です。

こないだ私のところへ、夫婦喧嘩して家を飛び出して七日目だという五十年配の奥さんがみえました。そして「実は先生、こないだ主人とした喧嘩は、なさぬ仲の息子と主人が連携したので、特別激しかった。主人が、ならば出て行け、と言ったので、出て行くわ、と言って出てしまいました。実家に帰って三日経つうちに、すこしさみしくなつて来、四日目の夜はひとりで泣いた。五日目になつたときに、謝つて来たら帰つてやろう、というふうに思った。七日目になつたら、主人のほうから謝つて来たので、いよいよ帰ろうと思います。けども、敷居をまたいだとたん、主人のことを思ったり、息子のことを思ったりすると、とたんにムカツと腹が立ってまいります。また、同じ繰り返しではかなわんの、どうかひとつ家へ帰るについての心得、秘訣を教えてください」と、弟が付き添いで

来た。

「あなたは、怒るのは性格だ、と言っておるけど、私は性格ということについては一言ある。あなたはぜひぶん短気だ、短気だつて言ってる。主人がひとこと言えば、三口も思わず出るらしいけども、短気だ短気だと自分に言ってるらしいけども、もともと生まれながら短気ということもないだろう。お母さんのお腹から出る時、怒りながら出たわけでもないでしょう」と言つてやった。うなずいておりました。「短気だ、短気とよく言うけれど、それだ、性格だ、性格だと、性格のせいにして、自分はちつとも悪くない、というふうに、みんな言ってるけれども、どうも、これは問題だね」と私は言った。

皆さん方も、そういうこと言つて、性格で誤魔化している場合あるでしょう。性格だ、性格だと言つて、性格はどうしようもないんだという形で、あっさり考えて、自分の思いにおさまらないことは、そのまま性格のせいにして過ごしている場合もあると思う。よく聞いて下さい。性格だ性格だ、というふうに自分に言いかけせて、自らそんなふうにしてしまつている場合があると思う。そのご婦人に、「あなた、短気だつて言ってるけども、あなたの都合のいい時にも、腹立つの？」と言つてやった。「都合のいい時には、腹はすぐ立たない、都合の悪い時だけ、短気で腹が立つ」と言つていた。「これは、

勝手気ままということだ。そんなこと、直さなきゃならん」と、私が言った。

まあそんなやりとりがあつた後、「どころで、先生、今夜帰つた時に」と言うので、「あなた、帰る時に『私も勝手なことをしてごめんなさい、申し訳ありません』と、そのくらの挨拶は、旦那の前でできるだろう」と言つたら、「挨拶としては、それはするつもりであります」と言う。心から、そのつもりになつてゐるわけではないんだ。「本当は、あなたも寂しかったんだらう。向かい合つてご飯を食べながら、『私も寂しかったわ』、こつひとこと言えばいいんだけど」と言つたら、「そんなことは、とてもとても主人の前では言えない」ということだ。

「今日一日」の実践

彼女はしかし、今晚帰つて、これから帰つたら五時だ。寝るまで、十一時に寝たとしたら、六時間くらいのことだ。「しかし、今晚ひと晩くらいは、口答えもせずに、怒らずに過ごすことはできるだろう。まず、今晚それだけしなきゃいかんね。申し訳なかつたということで謝つて、そうしなさいよ」「今晚、ひと晩くらいは、そういうふうにできるけども、明日になったら、どうなるかわからない」と言うんだ。

「今晚ひと晩、そのように過ごしたらいいんだ。愚痴を言わずに、怒らずに、口答えをせずに、

にこやかにしておつたら、それでいいんだよ。さて、明日の朝、今日一日中、一日はにこやかに、さわやかに、口答えをせずに、悪口を言わずに、せめて優しい言葉でもかけようというよくな心で、今日一日中、一日くらいは過ごそう、というふうに、自分でまず自分に言い聞かすことだ。夕べひと晩くらい持つと言つた。ひと晩持つんだぞ、一日くらいのことではできるだろう」と、私が言つたら、「一日くらいのことではできません」というふうに彼女は言つた。

問題は、「今日一日」ということです。これから、ずっと生涯直していこうというふうに構えてしまうと難しいことなるうかと思ひますので、今日一日、ひとつ精一杯、にこやかに、さわやかに、悪口を言わずに行こう、というふうに、今日一日を精一杯過ごせると、それでいいんだ。毎日毎日、今日一日、と思つて過ごしておるうちに、それが三日になり、ひと月になり、やがて一年になり、三年にもなる。自分の悪い癖を直したり、いい癖を自分につけようと思つたら、秘訣といつて申せることは、こういうことだと私は思う。そこでそこにあつた色紙に、私は「今日一日」と書いて、彼女に渡しました。

どうか、皆さん方、自分の悪い欠点というものが、確かにある。そして、それを現代の言葉で、若者らしい表現で、「これは私の性格よ、

性格だ」という形で誤魔化して、逃げている場合があります。卑怯ですね。それは直そうと思つたら直せる。悪いことと気づいたら、それはやめなきゃいかん。これはいいことだ、これはしなきゃならんというふうに通つたら、それを実行することですよ。そうして、その日その日に精一杯、自分を精一杯に持つていかなかったならば、自分がかわいそうですね、折角の人生だもの。どうか、そういう意味で、皆さん方の持つた可能性の全展開をしていただきたいと思う。自分で、もうこれが限界だとか、なんとかいうような弱音を吐いておつては、もつたないことだ。そして、どんなことがあつても、挫けずに、自分の胸に問うて問うて問いぬいていく。必ず答えは出てくるはずであります。他人のせいにしちゃいかん。おとうさんが悪いんだ、お母さんが悪いんだ、育つた環境が悪いんだ、社会が悪いんだ、という形で、人のせいにする若者たちが多いけども、そうじゃない。そういうったせいにして、そこをいくら掘り下げていつても、得るものは何もないということだけは、言つておきます。

一切衆生仏性あり

胸にしっかり自分に問うて、問うて問いぬく。そこに真剣さがあればあるほど、必ずすばらしい答えが出てくるはずだ。自分の心の扉を開く、

これがやはり仏さまの目指した、指さしたところだ、と固く信じております。

皆さん方の心の中には、本当に荘重なすばらしい仏性といったものを、みんな持つてる。それを真剣に問うことによつて、必ず解ることがあります。安心できることがありますので、どうか、そういう意味で、折角の人生でありますので、がんばっていただきたいと思ひます。私の戦後史の一端を申し述べまして、考えていることを、お話し申し上げたわけであります。結論から言いますと、あんまりさえない結論であつたかもしれないけれども、長時間に亘つてご清聴ありがとうございました。(拍手)

(文責在記者)

※当DVD収録の「講演録」には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。